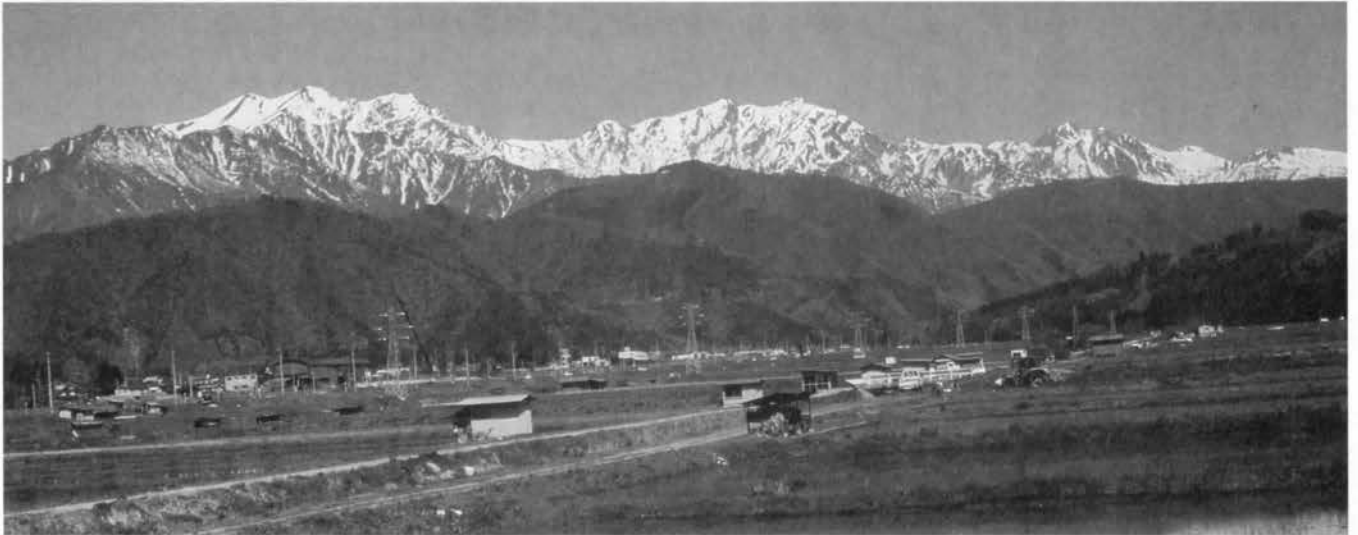


山と博物館

第50巻 第4号 2005年4月25日

市立大町山岳博物館



「山岳科学」の創造に向けて

高石道明

はじめに

「やま」はいろいろな意味において、我々の生活と文化に深いかわりをもっている。我々の生活・文化圏を区切り、気候に影響を与え、水を蓄え、産物を供給し、豊かな生物多様性を保持し、冒険と癒しの場にもなる。

しかし、我々はいまや、山の自然とうまく折り合いをつけてその恵を享受してきた先人の知恵を失ってしまっているのではないか。信州に暮す人々は、このことを最も敏感に感じ取らねばならない。信州大学が「山岳科学」という新たな学問領域を提唱するのは、まさにこのような問題意識に立つからである。

山岳科学の広がり

わが研究所が研究対象にする「山」は、最も標高の高いところから里山にいたる連続する自然系であり、研究所は、その範囲に含まれる全ての自然にかかわる問題を、もっぱら人間の諸活動との関係において探求し、山と人間の関係の新たなパラダイム（規範）を提唱しようとして創られた。人文・社会科学からほとんどの自然科学分野までを網羅する信州大学の研究の蓄積と、総合大学の力量を「山」を中心に結集することによって、どこにもないユニークな研究が展開できると確信する。

研究所が関心を持っている課題をいくつか列挙すれば、山から里にいたる生態系の機能的状況、森林の管理、里山の荒廃、登山や観光による過重な負荷、文化的伝統遺産の喪失

などが挙げられる。登山という人間的な行為の意味と歴史およびその将来についても、重要な課題と考える。

山岳博物館と山岳科学

梅棹忠夫が民族学博物館を創ったとき、博物館は過去の遺物や死んだものを展示するものであってはならない。最先端の研究成果をわかりやすく表現するいきいきとしたものになければならない。という意味のことを言っている。その意味で、博物館に研究機能は不可欠である。大町山岳博物館は、地方都市が運営するものとしては、この点では非常にすぐれた成果を挙げている。

ただし、博物館の活動の2大分野と考える「登山文化」と「山の自然」について、現在の状況を評価すれば、改善の余地は多分にあると言わなければならない。登山文化に関しては、最新の成果や情報に乏しいと思えるし、自然生態系の問題に関しても、現代の課題に直接迫るような表現が少ないと見える。

多くの知恵と資源を必要とすることで、あるが、みずからの研究と情報収集能力を高めることはもとより、他の研究機関や組織との情報交換と協力の体制を作り、それをうまく利用することも肝要であろう。山博が「山岳科学」研究のネットワークの中に位置付けられ、将来にわたってユニークな存在として発展することを、研究所としても期待している。

(信州大学山岳科学総合研究所運営委員長)

大町山岳博物館協議会委員)

山岳映像企画2004 報告

大町山岳博物館

はじめに

平成十六年に、富山県「立山博物館」、大町山岳博物館、中日新聞社の共同主催で、三会場において「山岳映像企画2004 山岳映画の先駆者、伊藤孝一没後50年 山嶽活寫それはホーム・ムーヴィーから始まった」を開催した。

「山岳映像企画」は立山博物館が開館当初の平成四年から毎年開催している企画である。平成十六年のそれは、両館による伊藤孝一没後五十年記念企画展の共同企画と、各館開催（立山博物館 会期七月二十四日、八月二十九日、大町山岳博物館 会期十月二日、十二月五日）の計画を契機に、大町山岳博物館も主催者に加わり、大町市では初めて実施することとなった。

伊藤孝一について

1892（明治二十五）年、名古屋に生まれる。京屋吉兵衛を当主とする伊藤家は、代々尾張徳川家の御用商人を務め、問屋業、両替商などを営んで莫大な資産を築き、伊藤殖産合名会社を創立してその資産を運用した。

父の急逝により、孝一は九歳で京屋吉兵衛七代目を襲名する。旧制中学を中退するが独学で多くの分野に学び、趣味の域を超えて非凡な才能を発揮した。

その趣味のなかに登山と映画撮影があった。大正五年七月には日本山岳会に入会（会員番号481番）し、本格的な山行を重ねる。このころより出版物への山の写真の提供、山岳映画の輸入公開、日本山岳会への資金援助など、当時の登山界に大きく貢献した。

1923（大正十二）年二月、大町の百瀬慎太郎、有明（現穂高町有明）の赤沼千尋らと針ノ木峠から立山への厳冬期横断登山を企

図したが、猛吹雪のため麓川谷の大沢石室にて当初計画を断念し、二月二十八日、大町へ帰着する。

同年三月二日、富山芦峯寺から同メンバーで再び入山。映画を撮りながらの「雪の立山 針ノ木越え」に成功し、日本初の雪山登山映画「日本アルプス雪中登山」を制作、公開し、大きな評判となり、宮中にも献納された。

また大正十二年から十三年にかけて自ら数棟の山小屋を新設し、三回の雪山映画撮影山行を行う。十二年十二月五日には上ノ岳冬期初登頂、十三年二月四日には薬師岳厳冬期初登頂を果たし、奥黒部領域を踏破・縦走して四月十九日に槍ヶ岳の頂上を踏む。

※この一連の記録映像は、立山博物館と羽田栄治によって「雪の薬師、槍越え」と題し、平成十二年に作品化された。

以降は本格的な登山活動を控え、家族との山旅を楽しむ。戦後、孝一は余生を東京三鷹に送り、1954（昭和二十九）年、その生涯を閉じる。享年六十二歳。

実施概要

□後援 中日映画社 日本山岳写真協会
（社）日本映画テレビ技術協会

□協力 アルパインツアーサービス

□会場・期日・入場者数

・名古屋会場 愛知県中小企業センター講堂 九月四日（土） 六〇〇名

・富山会場 富山県民小劇場オルビス 十一月六日（土） 八〇名

・大町会場 サンアルプス大町大会議室 十一月二十日（土） 一三〇名

□内容

①伊藤都留子氏所蔵未公開フィルム2本の解

説上映（いずれも平成十六年、立山博物館によるDVD編集版・無音声）
○「伊藤家・百瀬家、子供たちの黒部・五色原行」二十六分（原資料は昭和七年撮影、16ミリ、モノクローム）
○「伊藤・百瀬・赤沼、高地に遊ぶ」五分（原資料は昭和五年撮影、モノクローム一部着色）

解説は布川欣一氏（登山史研究者）・羽田栄治氏（山岳映像作家）・柳澤昭夫（大町山岳博物館館長）の三氏。
②壇上討論

「写し込まれた80年前の山と人——日本登山史・映像史のなかで」と題し、布川・羽田・柳澤の三氏で行った。

③「雪の薬師、槍越え」上映（平成十二年、立山博物館による16ミリ編集版）四十八分（原資料は大正十二、十三年撮影、35ミリ、モノクローム）

なお、富山会場には伊藤孝一の四女伊藤都留子氏、五女小松和子氏・進氏夫妻が、大町会場には赤沼千尋の次男赤沼淳夫氏、伊藤らの「雪の立山、針ノ木越え」当初計画の一部に同行し映画にも写っている竹内鳳次郎・ヒサ夫妻の長女竹内北子氏、長男竹内龍三夫妻、甥の岡田汪氏もお来しくださった。

伊藤都留子氏と赤沼淳夫氏については壇上で紹介の機会を設け、討論の冒頭に加わっていただき、本企画の意義がますます深いものとなった。

講師紹介

布川欣一（ぬのかわ きんいち）



昭和七年、北海道に生まれる。昭和三十年、北海道大学経済学部卒業の後、学習研究社、世界文化社、中央公論社勤務を経て、昭和十五年か

ら平成八年まで、東和大学付属昌平高等学校で教鞭をとるとともに山岳部顧問を務める。

現在、埼玉県久喜市教育委員会生涯学習活動講師。久喜登路会主宰。長く登山史を研究し、日本近代登山史を中心とする山岳論考、山岳紀行ほかの執筆を続けて現在に至る。主な著書に「山道具が語る日本登山史」、「山旅の宿」（編著、別冊太陽）、「日本百名峠」（共著）、「秩父困民党紀行」（共著）などがある。



昭和二年、東京に生まれる。若くから山に親しみ、高校・大学と山岳部に在籍。昭和三十年、中日映画社に入社。報道カメラマンとして、政治、文化、スポーツ等の分野で活躍。登山技術を活かして山と自然の作品を数多く手がけた。主な作品に「未踏の氷壁」、「交響詩立山」、「南アルプス」、「八ヶ岳」などがあり、幾多の作品が数々の賞を受けた。また、山岳雑誌などへ写真や記事を多数寄稿している。東京オリンピック、札幌冬期オリンピックの公式記録映画制作にも参加。宇宙科学博覧会記録映画プロデューサーなどを歴任。現在、（社）日本山岳会資料・映像委員長、日本山岳写真協会副会長、（社）日本映画テレビ技術協会会友、（社）日本ネパール協会編集委員として活躍。



昭和十五年、長野県に生まれる。後立山連峰、黒部丸山、唐沢岳幕岩などの冬季登山を中心に活動した。特に唐沢岳には厳冬期の初登頂を含め、六本の初登頂ルートを開拓した。スキー登山の普及にも大きな影響を与え、一方、「岩登り技術（基礎編・応用編）」、「雪氷技術」などの映像教材の制作、「登山技術」、「遭難救助技術」の編集・執筆に参画し、優れた登山理論を発表した。文部科学省登山研修所所長を経て、現在、市立大町山岳博物館館長。

昭和二年、東京に生まれる。若くから山に親しみ、高校・大学と山岳部に在籍。昭和三十年、中日映画社に入社。報道カメラマンとして、政治、文化、スポーツ等の分野で活躍。登山技術を活かして山と自然の作品を数多く手がけた。主な作品に「未踏の氷壁」、「交響詩立山」、「南アルプス」、「八ヶ岳」などがあり、幾多の作品が数々の賞を受けた。また、山岳雑誌などへ写真や記事を多数寄稿している。東京オリンピック、札幌冬期オリンピックの公式記録映画制作にも参加。宇宙科学博覧会記録映画プロデューサーなどを歴任。現在、（社）日本山岳会資料・映像委員長、日本山岳写真協会副会長、（社）日本映画テレビ技術協会会友、（社）日本ネパール協会編集委員として活躍。

主権者代表あいさつ

※以下は、大町会場の内容をベースに再構成した要旨である。

今年伊藤孝一が独自の登山を展開し、雪の山岳映画の撮影と制作に成功してから八十年、昭和二十九年、東京三鷹で亡くなられて五十年という節目の年にあたる。

そこで、映画上映と壇上討論により、日本の山岳映画の始まりの時期や、伊藤の山岳映画制作への思いや背景を紹介したい。

本企画の構成の意図は、アルピニズムのものと、「苦難を乗り越え、山を征服する」といった登山が主流の大正期にあつて、登山家でもない伊藤孝一が、何を求めて雪山をめざし、どのように登り、そして山の映画を撮ったのか、氏の一連の行動の背景にはどんな思いがあつたのかを、来場の皆様と一緒に検証していこうと考えたからである。

伊藤の著書「狸囃子」の一節「北越廻り」には、「吾等の製作する映画は、吾等及参加雇人並に其家族等の爲めの記念撮影にして、他に何等の意味を有せず」とある。

おそらく伊藤が、山に登れぬ家族に見せるべく、万感の思いで撮影したのが、最後にご覧いただく大正十二年から十三年にかけて撮影された「雪の薬師、槍越え」ではなかったのか。そして、こうした思いが素直に表現されているのが、初めに見ていただく昭和七年の「伊藤家・百瀬家、子供たちの黒部・五色原行」であり、昭和五年の「伊藤・百瀬・赤沼、上高地に遊ぶ」ではなかったかと思う。

このように考えると、伊藤の山岳映画制作の目的は、家族愛に裏打ちされたホーム・ムービーの目論見にあつたのではないかと、思えてならない。

このようなことを考え合わせながら「雪の薬師、槍越え」をご覧いただき、伊藤孝一の業績と、日本の山岳映画の始まりを振り返っていただきたいと思います。

なお、表題の「山嶽活寫」という言葉は、

今ではほとんどなじみのない言葉となつていますが、「活寫」はいわゆる「活動寫真」の略語で、大正十二年ころの新聞の見出しにもなつた言葉である。

①解説上映

二本の映像とも無音につき、各々専門の立場から三氏掛け合ひで同時解説をしていただき、鑑賞の補足とした。

いずれも未公開であり、伊藤孝一・百瀬慎太郎・赤沼千尋がこれだけ長く鮮明に登場する映像は、いまだ知られていなかったと思われる。

「伊藤家・百瀬家、子供たちの黒部・五色原行」とは

現存する伊藤孝一の最後の作品。伊藤の長女幾子・次女静子・次男英二・百瀬の次女美和（全員十歳代）の表情や、登山を楽しむ様子が行程上の風景とともに活写されている。カメラトラブルによるピンぼけカットが、行程記録に不可欠な部分にやむを得ず、納得の上で使用されている。

百瀬慎太郎と美和が途中で下山するため、登場人物は一貫しないが、基本的に、子供た



針ノ木小屋を出発

(昭和7年「伊藤家・百瀬家、子供たちの黒部・五色原行」より)

ちとサポートの孝一、という固定された登場人物の旅行記となつている。

「雪の針ノ木、立山越え」から十年の間に、孝一は、山、自動車、旅、風俗、美術、家族などをテーマに多くの映像を撮影している。試行錯誤の中で、映画とは何であるかを体得したのである。

現代の視点からは変哲のない作品に見えるが、映画が世界的にもまだ草創期にあつた当時、映画の基本を独学でマスターしこの作品に到達した伊藤の探究心と資質には感嘆すべきものがある。

「伊藤・百瀬・赤沼、上高地に遊ぶ」とは

昭和五年六月、奥村吉松を伴つて上高地に遊んだ記録映像である。遺存フィルムロールの前半が完成作品、後半が残フィルムのみとなりと推定される。

登場人物が一貫しないように見えるが、四名が交代で撮影したこと、カメラが二台（あるいはそれ以上）あつたことで、カットごとシーンごとに登場人物が代わつてしまう結果になつたと思われる。

こうした構成上の混乱はあるが、時間的にも空間的にも映像の流れを意図した編集がすでになされている。本企画では前半部分のみを上映した。

②壇上討論

※以下は、大町会場の内容をベースに再構成した要旨である。

〔司会〕

先ほど解説上映いただいたホーム・ムービー二本と、後ほど見ていただく「雪の薬師、槍越え」とを、皆さんの討論によつてつけていただきたい。

伊藤孝一・百瀬慎太郎・赤沼千尋という三人はいつた何者で、どんな関係だったのか。（布川）

昭和の初めころ、世の中に軍国主義的な雰囲気が強くなつてきた時期、三人ともああい



五色ヶ原にて 背中は伊藤孝一
(昭和7年「伊藤家・百瀬家、子供たちの黒部・五色原行」より)

う着流して悠然と、煙草をふかしながら上高地を歩いて映画を撮りつづけている。

伊藤は明治二十五年に名古屋に生まれた。尾張藩の御用商人をつとめていた裕福な家柄で、九歳の時に先代が亡くなったため、京屋吉兵衛七代目を継がされた。土地や借家等々、ケタ外れの資産があつたが、伊藤家の家訓は「新しく事業を起こしてはならない」だつたと言われている。つまり「危険なところに足を踏み出すのではなく、現在ある資産を確実に守れ」が、主人に課せられた任務だつた。

莫大な不労所得が入ってくる。しかも「事業をしてはならん、働いてはならん」のだから、勢い「金を使って何をするか」ということになる。伊藤孝一の場合は、非常に幅の広い趣味に金を使った。自動車に始まり、釣り、狩猟、植物栽培、日本画や仏教美術品や日本古典文学などの収集と幅広く、しかもそれがいい加減なものではない。一例として古典文学のコレクションは、評価が高く国学院大学の図書館などに、基本文献として伊藤の「甘露堂文庫」が納められている。そうしたレベルの趣味だつた。

大正の初めころから、山登りも伊藤の趣味



中の湯温泉にて 右から百瀬、赤沼、伊藤
(昭和5年「伊藤、百瀬、赤沼、上高地に遊ぶ」より)

のひとつになった。最初は富士山に登り、雪の季節には富士の山麓を歩き回って狩をしたが、長ずるに従って元気になって、山に親しむようになる。大正十年には燕岳の天辺近くに山小屋（現、燕山荘）を作る。赤沼家にも書画骨董、美術関係に造詣の深い人々がつながっている。そうした趣味をも通じて、大町の百瀬との交流ができていた。山登りだけではなく、そうした文化的な素地があった。

大正十二年の正月に、百瀬が大町でスキー講習会を開く。そこへ名古屋から伊藤、有明から赤沼らが集まる。昼間は練習、夜は対山館のコタツに入って、次はどの山に登ろうかと相談しているうちに、「雪の立山、針ノ木越え」のような、とんでもない話になってしまったと伊藤も書き残し、赤沼の本にも、そんなくだりがある。

活動していた家に生まれた。子どものころは茨城県の大洗に転地療養するほど虚弱だったが、長ずるに従って元気になって、山に親しむようになる。大正十年には燕岳の天辺近くに山小屋（現、燕山荘）を作る。赤沼家にも書画骨董、美術関係に造詣の深い人々がつながっている。そうした趣味をも通じて、大町の百瀬との交流ができていた。山登りだけではなく、そうした文化的な素地があった。

大正十二年の正月に、百瀬が大町でスキー講習会を開く。そこへ名古屋から伊藤、有明から赤沼らが集まる。昼間は練習、夜は対山館のコタツに入って、次はどの山に登ろうかと相談しているうちに、「雪の立山、針ノ木越え」のような、とんでもない話になってしまったと伊藤も書き残し、赤沼の本にも、そんなくだりがある。

「吾等の第一目的は・・・と、山は楽しみに登るのだ」ということを、まず鮮明に述べている。当時これは非常に勇気のいる発言だったと思う。いわゆるアルピニズムという「百万人といえども我行かん」「困難な登山に立ち向かう」とする、大学山岳部やそのOBの登山活動が際だっていた時代だからだ。

さらには「臨機應変にして、期限と行程を定めず」とか、探検や冒険はしないと大胆率直に述べている。またホーム・ムーヴィー、つまり自分たち関係者だけで楽しむための映画作りだ、と宣言している。だから今回の山岳映像企画のサブタイトルも「それはホーム・ムーヴィーから始まった」なのだ。

ところが図らずも、山岳映画の領域で画期的な作品に仕上がってしまった、ということになるわけである。

〔羽田〕
35ミリの手廻しカメラで「薬師、槍越え」を撮ったのが大正十二、十三年。今皆さんが



上高地にて 右から伊藤、奥村、赤沼
(昭和5年「伊藤、百瀬、赤沼、上高地に遊ぶ」より)

ご覧になったのは昭和初期の作品で、年代が前後している。

もちろん昭和初期当時に、「ホーム・ムーヴィー」という言葉はない。あえてホーム・ムーヴィーというなら、塚本閻治の昭和中期の山岳映画こそがホーム・ムーヴィーの草分けと言える。

ホーム・ムーヴィーというのは、今で言えば皆さんが小型ビデオカメラで撮る作品のこと。先ほどの作品はともかく、この後ご覧いただく「雪の薬師、槍越え」や、大正十二年二、三月の「雪の立山、針ノ木越え」などの映像は、伊藤らの言う「吾等及参加雇人並に其家族等の爲めの記念撮影」という意図を超えた映像だ。

事実、「雪の立山、針ノ木越え」のフィルムは伊藤自らの編集によって「日本アルプス雪中登山」に作品化され、身内のみならず、名古屋や東京など中部・関東圏の各地で公開上映され、大評判となったそう。

本格的な映画の誕生は1895（明治二十八年）年。フランスのリュミエール兄弟が発明したシネマトグラフという動く写真をスクリーンに投影したことに始まると言われて

いる。

日本に入ってきたのは明治三十年。稲畑勝太郎がリュミエールのシネマトグラフを輸入し、吉沢商店が公開している。当時の映画は三脚をつけて、手で廻して、同じようなところを撮った。いわば舞台や芝居の延長のような映像だった。

自然ものでドキュメンタリーの草分けは、1911（明治四十四年）年、白瀬中尉の南極探検記録である。映像のワールドワイドとしても先駆けた。それまでのほとんどの映画はセットで撮影されていた。

山岳映画において伊藤孝一はまさしく草分け。その前に松竹が「日本アルプス」を撮っているが、ほとんど公開せず一部の人々の目に触れただけだった。伊藤の作品は日本最初期の山岳映画と言っても言い過ぎではない。私は「雪の薬師、槍越え」のフィルムが赤沼家の土蔵から発見されて、今日ここに作品として甦るまでの一連の作業に携わった。

訴求力において、また事実の証人という点においても、映像に優るものはないと確信している。ただ、赤沼家で発見された伊藤のフィルムはラッシュフィルム。撮影して現像してプリントに起こしたままのもの。それだけでは資料的価値は低い。作品化して多くの人々に見ていただいてこそ意義があり、そのためには編集・録音が不可欠だと思う。

フィルム・アーカイブという言葉が定着しつつある。

アーカイブには四つの段階や役割がある。古い作品を今の技術で甦らせ、カタログを作って内容を分析し、仕上げ、そして一番大切なのは、こうして多くの方に見ていただくことだ。

「雪の薬師、槍越え」はアーカイブそのもののズバリだ。発見されたままではなく、ワンカットワンカット、何が写し込まれているか分析し、時代の背景や価値も考慮して作品にした。単なる映画界の記録としてではなく、

人類の文化遺産として捉えていただきたい。壇上討論のテーマは「写し込まれた80年前の山と人」ということで、まさしく時代背景や服装、当時のものの考え方で映像から読み取れる。伊藤孝一の映画には、山と人のかかわりや思いが、ワンカットワンカット写し込まれている。

以上、これから見る「雪の薬師、槍越え」の予備知識としていただきたい。

〔司会〕
当時のファミリー登山の映像を見た感想。また、次に登場する冬の奥黒部領域の山々とその登山について。

〔柳澤〕

大正時代には「大正デモクラシー」という言葉に象徴されるような、開放的で明るい時期があった。風俗の面でも「モボ、モガ」つまり「モダンボーイ、モダンガール」という言葉が流行ったように。黒部・五色行の子供たちの服装などには、その流れが感じられる。子供たちのリラックスした様子も印象的だ。ファミリー登山の観点からすると、子供たちは、父親の伊藤や百瀬がいつでも危険に対処してくれるという、大黒柱のような安心感がある。大抵の子供は初めて雪溪の上に立つと怖がるが、映像の中の子供たちは軽アイゼンをつけているとはいえず、針ノ木の雪溪を怖がらずに登っている。その意味でも温かいホーム・ムービーである。

積雪期の薬師・槍の大縦走は、今でも大変な登山だ。私の友人は、厳冬期に前穂高の北尾根から穂高、槍を越えて立山まで、およそ一ヶ月かけて大縦走した。数々のヒマラヤの山に登ったベテランだが、「ヒマラヤ登山より何より、その縦走が一番苦しかった」と言っていた。

ところが「雪の薬師、槍越え」の映像は、好天のなかでのんびり登山を楽しんでいるように見える。危機感せまるドラマがない。普通、冒険とか凄い登山の映像というと、



有峰最後の姿
(大正12~13年「雪の薬師、槍越え」より)

ハラハラ、ドキドキするようなドラマティックな場面があって、「ああ、よくぞ危険を克服して」という筋書きになる。しかし、「本当の冒険」というものは、そうした危機感やドラマがないところにこそある、と私は思う。大正十年、横有恒がアイガー・東山稜を初登攀した。世界的に高く評価された登山だった。日本の登山はその後、横たちの影響を受けて大きく変わる。夏山の頂上を目指す登山から、夏山なら岩壁や未知の谷など、より険しいところ、より難しいところを登ろう、という時代に入る。

先ほどの「黒部・五色原行」の四年前、昭和三年十月に、冠松次郎が鹿島槍ヶ岳の東尾根を初登攀している。鹿島川の北股本谷から二ノ沢をつめ、東尾根に出て山頂に立った。冬の山も本格的に登ろうという時代となる。日本の冬の山には強風が吹いている。一夜にして一メートル、二メートル近い積雪をみることもある。冬の山では本当に自然に翻弄される。そこでどうやってテントを張って生活するのか、暗中模索の時代だったと思う。その時代を経て初めて、昭和初期にアルピニズムが花開いた。

映画を見る限り、伊藤たちは淡々と薬師・槍を縦走している。「素晴らしい冒険」だったと言える。

皆さんの多くは、登山が文字通り危険を冒すという意味での「冒険」の世界を求めて発展してきたように思うだろうが、実際はそうではない。いかに安全を確保するか、安全性をいかに高めていくかが、登山のレベルを押し上げてきた原動力だと私は思っている。

伊藤隊はものすごく安全に配慮している。冬山生活が分からない時代に、どうやって安全を確保するかが、伊藤にとって戦略上の最大の課題だったと思う。

その戦略が三つの基地を作ることであり、芦峯寺の山人で確実なサポートチームを作ることだった。伊藤のリーダーとしての力の大きさを、これから見る映画のなかで感じていただければと思う。

〔司会〕

伊藤は薬師沢の小屋掛けまでいれると四つ山小屋を作り、周到綿密な準備のもとに安全な山行を重ねた。アルピニズムと伊藤孝一の考え方や登山の方法とを対比してみたい。

〔布川〕

伊藤の薬師、槍の大縦走を評価する場合、マスコミも含めて、その時代の登山状況を押さえておく必要がある。

伊藤たちが針ノ木越えに挑戦しようとした直前に、アイガー・東山稜を初登攀した横有恒、慶應山岳部OBの三田幸夫、学習院から北海道大学に行った板倉勝宣の三人が立山にスキーで登って途中猛吹雪にあい、松尾峠で板倉が凍死した。雪山登山が盛んになりつつあるこの時代だが、「北アルプスのような山へ冬に入ると、必ず遭難するのではないか」という危険なイメージがつきまといつてきた。マスコミは、少しきつく言えば、遭難を期待しているのではないかと、という思いさえいだかせるくらいに過剰な反応をした。

大正十二年の針ノ木越えの当初、伊藤らが



真川の小屋とサポートの人々
(伊藤都留子氏所蔵写真)

猛吹雪で大沢石室に閉じ込められて動けなくなっていた時に、下界では遭難記事が大量に出ている。針ノ木峠を越えて立山を目指す計画を断念して大町へ引き返し、富山側から登り直すために乗り込んだ汽車のなかでも、自分たちが決めてもいないのに、「こういう計画だ」と先走りして、「またきつと危なくなるだろう」という記事を読んで驚く。危ない目に遭つてくれるほうが面白いというように、あまり上等ではない魂胆が明白な記事が多かった。ところが伊藤隊は、立山温泉から横たちが遭難した同じ峠を通って、石橋をたたくような安全な手順を踏んで雄山の天辺まで登り、しかも映画を撮って帰ってくる。

すると、横有恒をリーダーとするアルピニズムの世界、もつと広くは日本山岳会のようなところは、対応に困ってしまう。「素人のようなただの金持ちが、映画作りという遊びにも似たことをしながら登って、成功してしまつた」当時の先鋭的な登山家の多くは、そういう評価しかできなかった。

登山活動の順番では、最初の人为天辺を指し、頂上へ行くルートがどれだけあるかを探つて、いちばん登りやすいルートから登る。



芦峯寺の人々の仕事ぶり(竹細工)
(大正12~13年「雪の薬師、槍越え」より)

その次に、峰と峰とを尾根伝いに結ぶ縦走だ。これは雪山でも同じことだ。
伊藤の雪山山行のころ、大学山岳部の連中はピークを目指す登山に集中していた段階だった。伊藤はそのころに、立山から黒部に降りて針ノ木峠に登って降りてくるとか、さらにはもつと大きく、立山連峰から槍まで縦走しようと、破天荒なことを考えた。その実行にあたって、伊藤が採ったのは、テントを使うのではなく山小屋を作ってしまう方法だった。山小屋を作るには莫大な金がかかるが、惜しまずに必要なだけ費用をかけた。
赤沼千尋が「山の天辺」という本のなかで、その額を二億か三億と計算している。本当はそれどころではない。最初に芦峯寺の元締めのところへ現金を二十万円ポンと渡した。それで芦峯寺の山の人たちに長期の仕事を依頼し、つまりは彼らの生活を保障した。
それから映画にも出てくるが、山小屋を三つ、小屋掛けも含めて四つ作る材木などの調達費用や、世界最新鋭のカメラ、最高品質のフィルムをたくさん調える、映画を撮って現像する費用も必要だ。それらをざっと計算してみると、今に換算して三十億、四十億とい

う規模になってしまふ。今考えれば、ヒマラヤの遠征隊に南極の遠征隊をくつつけても大丈夫なくらいの費用のかけ方をした。
その意味では、金で安全を買った、経済力をもって安全な登山を自ら担保した、とも言える。にもかかわらず、雪山は雪山だ。その厳しさはあつたらうに、映画で見る限り、天氣の良い時にしか行動していかない。
年配の方はお分かりになると思うが、山小屋だから「まずい飯で我慢しろ、あたりまえだ」とか「寒くても、トイレが汚くても仕方がない」では、伊藤は困るわけだ。うまい飯を食って、安心してそこに長居できて、周辺の山遊びや狩、映画が撮れる拠点となる山小屋でなければ、伊藤にとつて意味をなさない。
しかも、その山小屋を使って商売しようという気がまるつきりない。終われば芦峯寺の人たちにポンと預けて「いいようにして」と言うのだ。実際に二つの山小屋は移築されたり、部材が使われたりして生きのび、以降の様々な登山活動に活用された。その点でも、伊藤の遺産は登山の発展に役立った。
「北越廻り」にはまた、「自然の雄大に對し、自己の弱小を認識して……つまり自然の前で人間の小ささを認識して、けつして冒険をしない、要するに安全登山第一だと明記している。さらに、「吾等は自然に對し徹底的に臆病たるべきこと」と言つて、慎重の上にも慎重、安全以外考えていないくらいなのだ。しかし、山登りの世界だから危険な場面もある。そして平地では味わえない、自然の莊嚴な美しさにふれることもできた。

伊藤はこの活動をピークに「吾が事成れり」という感じで、経済的な事情もあったが、山の第一線から深く身を引いてしまふ。そうした伊藤孝一の考え方と行動は、私には非常に鮮烈で印象深い。
〔司会〕
アーカイブという言葉が出た。「雪の薬師、槍越え」には芦峯寺の人々の習俗や服装、今



手廻しカメラによる映画撮影
(伊藤都留子氏所蔵写真)

はなき有峰集落の様子なども写し込まれていて、情報は無限だと思ふ。再度、映像資料の真価とは。
〔羽田〕
伊藤孝一は映画史や登山史に確実に名を残した人ではないが、立山博物館のアーカイブ活動によつてその存在は甦り、再評価されつつある。
伊藤孝一の素晴らしきは、映像という財産を私たちの時代にまで遺してくれたことだ。まさに映像は文化遺産である。
「山岳映画はどうあるべきか」、八十年前の映像は、そう問いかけて続けていると思う。

③「雪の薬師、槍越え」上映
伊藤孝一は、大正十二年十一月から翌十三年四月にかけて三度の雪山山行を實行。上ノ岳冬期初登頂、薬師岳冬期初登頂を果たし、奥黒部領域を踏破して槍ヶ岳に到達した(積雪期縦走)。
この山行の35ミリフィルム映像記録は、未編集のまま赤沼家に遺され、昭和四十年に名古屋の報道カメラマン上田竹三によつて見出された。

この映像には雪の北アルプスを目指したパイオニアたち、それを支えた山案内人たちの活躍、当時の服装や装備、変貌前の僻村有峰の風景などが写し込まれている。資料価値はすこぶる高く、登山史の枠組みを超え、分野の研究に寄与しうる内容を備えている。

総括

名古屋、富山、大町、伊藤孝一ゆかりの三会場での開催には実意義深いものがあつた。名古屋や富山には本企画の固定ファンも訪れて盛況であつたが、ことに初めて会場となつた大町は、百瀬慎太郎の本拠地であり、赤沼千尋の有明からも遠くはないだけに、八十年前の映像が臨場感をもつて甦った感がある。
本企画は、「伊藤孝一の、家族愛に裏打ちされたホーム・ムーヴィーの意味を、山の映像に探る場とする」ことをテーマに構成した。従つて上映は、最もホーム・ムーヴィーらしい映像から始めることとした。
壇上討論のあらずじは、後半に見せる「雪の薬師、槍越え」との関連も考慮し、主催者と講師とで十分に練り上げたつもりではある。参加者にその意図が十分に通じたか、若干の危惧を残した。次回の反省としたい。
※文中、史上の人物については、敬称を略させていただきます。

人事異動のお知らせ
四月一日付で岑村隆学芸員が産業建設部建設課庶務係へ転出、民生部福祉課福祉係兼福祉事務所福祉課福祉係より勝山直人が転入しました。また、動物飼育担当臨時職員の前橋基子さんが着任しました。

山と博物館 第50巻 第4号
発行 二〇〇五年四月二十五日発行
〒388-0002 長野県大町市大字大町八〇五六
市立大町山岳博物館
TEL 0266-221111
FAX 0266-221113
郵便振替口座番号 005401713193

印刷 奥村印刷
定価 年額一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)
郵便振替口座番号 005401713193